

江村治樹著

## 春秋戰國時代青銅貨幣の生成と展開

Lothar von FALKENHAUSEN

前世紀中葉以來の中國における考古學的發見の爆發的増加のために、多くの研究分野が不可逆的に變容したが、古錢學もその一つである。長年にわたる研究の集大成である本書は、現在利用可能な資料の寶庫を全面的に活用し、古錢學研究のための新しい、考古學に基づいた枠組みを確立するものである。著者は、考古學的に獲得された先秦貨幣の資料集成を辛抱強く行っているだけでなく、おそらくより重要なこととして、この資料の特性に適した、洗練された一聯の分析手法を考案している。このように、貨幣を史料として學術的に検討するための新しいパラメーターを確立することによって、著者は、傳統的な貨幣コレクションの資料よりも、考古學的に獲得されたデータが、比較にならないほど高い「質」をもつという事實を證明している。結果的に、かれの所見は、廣く受容されている先行學説とは往々にして食い違いが、堅實で従って顯著に説得的である點では前例がない。

初期の金貨・銀貨の極めて限られた遺物は除外し、中國におけ

る原始貨幣の一形態である子安貝のような資料のより早い時期における使用<sup>①</sup>には簡単に言及するだけで、著者は先秦時代の銅貨幣および青銅貨幣に焦點を當てる。これらの貨幣のほとんど全ては何らかの合金なので、それらを青銅貨幣と汎稱することはもつともである。年代的に、本書の範圍は、紀元前一〇〇〇年紀中葉の青銅貨幣の出現に始まり、前二二一年の秦の統一に終わる。ポストモダン的な言動として、一部の讀者には衝撃的かもしれないが、著者は貨幣を何よりも一つの文化的「テキスト」と考えている。かれは、「貨幣の經濟史的研究よりも貨幣の形態や文化的、政治的背景の問題に傾斜している」(四七一頁)と謙虚に述べている。しかし、實際には、本書に記された研究は、東周時代の東アジア大陸部における經濟的動向の理解に高度に關聯している。こうした關聯は將來の學界においてより完全に理解されるようになるであろうが、著者も賞賛すべき慎重さで、經濟史の文脈におけるかれの分析の重要性を再三示唆している。

貨幣は理想的な研究材料である。手輕で、豊富で、視覺的に魅力的で、しばしば銘文をもち、高度に規格化されて時代と地域を特定できる。貨幣はただちに見分けが付き、分類に便利であり、平らでサイズが小さいので、ほかの大半の考古學的資料に比べて、記録し複寫することがより容易である。適切に解釋されれば、貨幣は正確な年代の指標として、また政治史・經濟史の記録として無比の價值をもつ。學者たちはこれらの利點を何世紀にもわたって利用してきた。

ヨーロッパでは、ルネサンス時代における近代的歴史學および古器物學の正にその開始の時點から、古錢學は歴史學の傳統的な

補助學 *auxilia* の一つとして培われてきた。そして、今日では、博物館や研究施設において十分に確立された學問分野である。古代・中世世界に對する現代の知見における古錢學研究の貢獻は極めて重要である。Sir William Woodhouse Tarn (1869-1957) が、記録の乏しいアレクサンドロス<sup>3</sup>の征服に續く數世紀の中央アジアとインドのギリシア系諸王國の歴史を、ほぼ貨幣のみに基づいて復元しえたことは、そのほんの一例であるに過ぎない<sup>2</sup>。本書は、中國資料においても同様に、それに匹敵するほど重要な研究成果を獲得しうることを證明している。

東アジアでは、貨幣は少なくとも中世以來、歴史的な動機で収集されてきた。これは、陝西西安何家村の貴金屬製品<sup>3</sup>の窖藏より出土した銀器の一つから發見された貨幣のコレクシヨン<sup>3</sup>によつて考古學的に證明されている。このコレクシヨンは、先秦時代の主要な形態の貨幣それぞれの實例、唐代までの帝制歴代王朝（分裂時代の北朝・南朝の雙方を含む）それぞれの貨幣、日本、トゥルファンの高昌王國、ビザンツといつた地域の數種類の外國貨幣を含む。明らかに、今では未知のコレクターにとつて、貨幣は、歴史的な時間、空間、正統王朝の推移、國際的關係などを物質的に體現するものとして意味づけられていた。

文獻から知られていることとして、八世紀中葉の何家村窖藏の頃までに、このような古錢學的鑑識眼は少なくとも二世紀にわたつて培われてきた。これを主題とする論文は、分裂時代の梁代にまで遡りうる。北宋時代以降、古錢學は傳統的古器物學たる「金石學」の一部となった。しかしながら、わたくしの知る限りでは、中國の高等教育機關において、古錢學の専門講座は存在し

たことがなく、貨幣は久しく、青銅器・鏡・寶石などに並ぶ骨重の一分野とみなされてきた。

著者は本書の序章において、まず何世紀にもわたつて中國と日本で築かれてきた、古代中國の古錢學に關する膨大で高度な研究を要約する（三一―一七頁）。これはごく近年における多數の顯著な業績をも含む（最重要文獻の有用で簡明な文獻目録が四三―四三七頁に示されている）。著者自身の仕事は、この研究の文脈の中で緊密に構成されており、本書の大部分は、ほかの學者が公表した所見を實直かつ非常に詳細に鑑別し、今日利用可能な考古學的資料によつてそれらを評價するものとなっている。先行研究に對する、こうした長大な議論のあとに、著者は、その考古學的データベースや分布圖から獨自に導き出した自身の判断を示す。

序論の後半部分（一七―一九頁）では、著者は簡潔にその方法的な原則や本書の目的を述べる。ついで、第一章（二一―九八頁）では、齊・燕・三晉（韓・魏・趙）・楚・秦の順番で、戰國時代の貨幣の一般的説明がなされる。第二章（九九―一六八頁）は、嚴密な類型學的觀點から同じ資料を再検討する。東周古錢資料の大部分を占める刀錢と布錢に焦點を當てて、著者はそれらの起源をたどり、流通年代、地理の分布、本來的な性質と全般的な類型學的發展を確認する。續く第三章（第七章の專論は、第一章・第二章で提示された貨幣諸形態のうちのいくつかに關するより詳細な議論である。第三章（一六九―二〇九頁）は、齊大刀に關わる。それは傳統的には中國最古の貨幣とみなされてきたが、著者は、それが流通するようになったのが前四世紀中葉を遡らなことを證明する。第四章（二一〇―二五二頁）は、橋形方足布を

扱う。年代的により早いと以前は考えられていた今一つの貨幣の形態だが、戦国時代の魏に流通していたとする。第五章(二五三―三一二頁)は尖足布と方足布に轉じ、それは戦国時代に中原北部で廣く流通していた。第六章(三一三―三七二頁)は、楚の貝貨(俗に「蟻鼻錢」として知られている)を、第七章(三七三―四二二頁)は秦とその周邊諸國の圓錢を論ずる。各章には當該貨幣出土の分布圖と包括的な一覽表、各項目に對する几帳面な參考書目が附せられている。これらの一覽表は形式的には統一されていないが、それぞれの貨幣形態の複雑性に適合しており、情報の内容を最大化し、無駄を最小化している。終章(四二三―四三七頁)は、著者の所見を包括的に評價する。

西洋人は著者の參考書目が中國語と日本語のものに限られていことに氣附くだろう。しかし、これは決して、著者の側の怠慢ではなく、西洋の學者の中國古錢に對する言語道斷な無視を反映するものである。主に貨幣コレクターの需要に應えた中國人の著作の英語版を別にすれば、本書に關聯する、先秦貨幣についての西洋言語で著された独自の研究は、わたくしの知る限りでは二件しかなく、一つは英語で書かれた未公刊の博士論文であり、今一つはフランス語で書かれた圖録である。いずれも、それが基いた中國人の著作を超える重要な境地を切り開くものではなく、現在利用可能な資料の性質に保證され、著者が本書によって例證したような體系的な方法で資料を研究したものではない。ごく控えめに言っても、古錢學に關する限り、西洋はいささか後進的である。西洋の中國學者がなぜ先秦古錢にほとんど關心を拂つてこなかったのが、當然問われよう。何にせよ前近代の問題一般に學

者が耽溺することに水を差すような明白に實利的な理由を別にすれば、三つのより具體的な理由に思い當たる。それは、いずれも古代中國の貨幣と古代世界のその他の地域の貨幣との明白な相違に關わる。

まず第一に、中國の青銅貨幣は、西洋の金貨・銀貨に比べて全く單純に本來的な價值が乏しい。これはそれらの使われ方における一定の相違を反映している。西洋の貨幣とは異なり、古代中國の青銅貨幣は、原則として、蓄財の手段としての機能を志向していなかったようである。一般に、それらの金屬の實質價值とその交換價值はほとんど相關しなかった。それは信用や威信、および／あるいは、發行者の政治的權力といった要素によって保證されていた。その經濟的機能において、東周時代の貨幣は、このように經濟的取引を容易にするトークンに似ている。著者が十分に證明するように、考古學的發見によれば、既知のそれぞれの同じ形態の貨幣の間で、さらにはしばしば同じ窖藏から伴出するもの間でさえも、大小、重量、金屬の組成には大きな差異が認められる。しかし、それぞれの額面の大小や重量の規格統一を法制化したり、貨幣の品質低下を處罰したりするよりも、政府當局は一定の額面の全ての貨幣が均一に扱われるよう布告している。著者は繰り返し(例えば、三八九―三九〇頁)湖北雲夢睡虎地で出土した前三世紀中葉の秦の法律文書の「金布律」の關聯する一節に言及する。それは流通している貨幣を選別することを特に禁止している。

第二に、中國の銅貨は西洋のものよりも視覚的な魅力が乏しい。著者の見積もり(四二〇頁)では、世界のどこにも類例のないような、たいへんな多様性にも關わらず、先秦中國の貨幣は簡素を

最優先している。その唯一の顯著な特徴は、ナイフ・すき・圓盤、ごく稀に長方形の棒、および子安貝といった外形と、決定的には銘文である。帝制時代の貨幣は、實質的に全てが顯著な方孔を銘文が取り巻く圓形であり、より執拗に統一されている。古錢學者の關心を引くような顯著な特徴は、西洋の貨幣に比べて、このように必然的にわずかであり、視覺的にも魅力に乏しい。

第三に、中國の貨幣のデザインや製造は、藝術的習練を要し、あるいは藝術的精緻さに屬するものとは認知されてこなかった。好個の例證として、前近代中國の彫刻の歴史は、メダルというジャンルを完全に欠いている。それは貨幣より派生し、ヨーロッパなどでは美術史の特定の時代において藝術的創造性のたいへん重要な焦點であり、今日でも一定の重要性をもつ。貨幣は、たとえば漢代の不死の圖像などでは、藝術のモチーフとして現れているが、それにも関わらず、中國において、貨幣それ自体は藝術的創造性を試みる對象では決してなかった。そのうえさらに、ほとんど指摘する必要もないことだが、多様なシンボルや繪畫的モチーフとともに、ほとんど最初からそれを發行した支配者の肖像を描いた西洋の貨幣と異なり、中國の貨幣は、先秦時代・帝制時代を問わず、完全に具象的な圖像を缺いていた。ちなみに、こうした特徴は、漢代中國の旅行者が非常に異質な視覺的特徴をもつ西洋の貨幣を目撃したことについて報告したのちも維持された<sup>8)</sup>。中國銅貨の簡素な外見は意圖的な文化的選擇の問題であつたといえるかもしれない。

これらの相違は、西洋の古錢學者が中國の貨幣を無視してきたことを説明はするものの免罪するわけではない。本書は先秦中國

の研究に對するこの問題の竝外れた重要性を力強く想起させる。著者は、貨幣が東周（とりわけ戰國時代）考古學のあらゆる局面に關聯することを證明している。貨幣は、都市遺跡とその經濟生活、地域内および地域間の相互作用、軍事史、種々の古文字學的問題に光を投げかける。特に貨幣の考古學的研究は、歴史地理と不可分であり、銘文に見える地名を正確に比定し、それが所屬する國家の流動的な領域に關聯づけるだけで、その年代と歴史的な意義を確定できる。著者はそうした問題に關する研究の現況を、かれの考古學に基づく貨幣分布圖や、非常に重要なことだが、一國の領域内だけでもつばら流通する貨幣と、遠く政治的境界を越えて流通する貨幣とが存在するという所見に有効に結合している。

公平にいつて、著者の研究によつて、先秦中國の貨幣史の範圍はある程度壓縮された。以前の研究は因習的に貨幣を春秋時代前期に遡るものと想定してきた。しかし著者はこれが事實ではありえないことを證明した。嚴密な意味での貨幣が出現する以前に中國のいくつかの地域に存在した特定の形態の金屬原始貨幣、たとえば山西南部曲沃地區のミニチュアの布や、北京北方延慶のいわゆる山戎遊牧民の墓の削刀の年代は、春秋時代中期を遡らず、實際の貨幣は、春秋時代後期、前五五〇年頃以降によりやく出現する。その考古學的文脈と型式的特徴の慎重な検討に基づき、著者はさらに傳統的には春秋時代に年代づけられていた特定の形態の貨幣（たとえばすずに言及した齊大刀や傳統的には周王朝に屬するものとされてきた圓孔圓錢）の年代が戰國時代を遡り得ないことを確定しえた（圓孔圓錢は魏のものとされ、周王朝で發行され

た貨幣の存在は現時点では確認できない。一方、考古學的發見は、傳統的には前二二一年の秦の統一に關聯づけられていた半兩の銘文をもつ方孔圓錢が、實際にはその何十年も前から秦王國の内部で廣く流通していたことを疑問の餘地無く證明している。

前六世紀後半に中國で最初に貨幣が出現したのは偶然ではなかったかもしれない。考古學的發見は、その時期に物質文化の多くの局面に重大な變化が發生したことを明らかにしている<sup>(11)</sup>。本書の主題に關係するものとしては、まず、都市的集落の構造と外見の變化があり、それは大規模に成長し、社會構造への關與を増大させ、ついで、最高級エリート成員と普通の住民の社會的地位および富の差の擴大は、建築、さらに非常に顯著に墓葬の遺物に現れ、鐵器使用の普及などの技術革新は、農業や戰爭の性格の變化をもたらし、さらに社會的流動性の増大や、市場原理經濟の擴大とともに、急速な人口増加が認められる。貨幣の出現が、この相互に關聯した變化の一部であったことは疑いない。當初貨幣は限られた地域、具體的には北方の燕と中原北部の晉のみで出現し、流通量は少なかつたようである。貨幣の使用は戰國時代中葉まで普及しなかつたが、特にこの時期の最後の數十年に、流通量、流通範圍、および經濟的交換手段の性質について全面的な變化が普及しなかつたことが示唆される。

アジア全域を通観すれば、中國初の青銅貨幣が、鐵器時代のアナトリアおよび古拙期ギリシャの前六〇〇年に遡る西洋最古の貴金屬貨幣とほぼ同時代であることが注目される。雙方の現象に何らかの關係があつたのかもしれないという想像を禁じ得ない。この問題は現時点では解答できないが、前二世紀末の絹の道開通に先

立つ五〇〇年間における東西交渉の可能性に關する問題を同様に提起しうるような東周時代中葉におけるいくつかのその他の現象が存在することで、こうした可能性を許容することも是認されるであろう。その一部として、天文學用語<sup>(12)</sup>、音樂理論<sup>(13)</sup>、ツィター<sup>(14)</sup>、藝術における有翼獸のモチーフ、埋葬習慣の變容<sup>(15)</sup>、製鐵技術の受容を列擧しうる。確かに、アジア全域規模でのこれらの問題はほとんど研究されていない。それぞれの事例について、證據は今日も不明瞭のままであり、過去數十年においてより多く、より質の高い關聯資料が出現しているにも關わらず、近代の政治的境界が、國家ごとに區切られた學術コミュニティの間の相變わらずの知の相違とともに、發展を阻害している。ここには將來の研究における巨大な難題が横たわっている。

貨幣の場合、アジアの一端から他方への何らかの「刺激の擴散」の可能性は、北方邊境の國家である燕の刀錢が中國最古の貨幣であり、燕に隣接するユーラシア草原地帯の遊牧民との交換を通じて考案されたいという著者の發見によってとりわけ強化されたように思われる。さらに南方の楚が青銅貨幣・金貨・銀貨を混用したことについては、インドとの關係があつた可能性が想定される。インドでは、楚と同様に前四〇〇年頃から、長方形の金貨・銀貨が製造されている。この問題は、インドや西南アジアに關係する可能性のある様々な藝術的モチーフが、同方向からの佛敎の傳來に何世紀も先立つ前一〇〇〇年紀後半に中國において出現した<sup>(18)</sup>ことと聯動して、さらに研究されるであろう。

ちなみに著者の分析は、楚が決して東周中國において金貨をもつた唯一の地域ではなかつたことを明らかにしている。金貨は、



埋葬用の低品質の明器と同様に、現時点では楚だけで實例が獲得されている。先行研究に導かれて、著者はすでに言及した齊大刀や晉の後繼國家である魏の都城から出土した橋型方足布といった特定の形態の貨幣の銘文が、金本位制におけるそれらの法定交換価値を示していることを明らかにしている。秦でも同様に、青銅貨幣である半兩錢の名目上の価値は貨幣としての金の使用に關聯していた。しかしながら、現時点では、戰國時代に北中國で用いられていた金貨、あるいはより可能性のあるものとして地金の實例は缺如している。興味深いことに、化學分析によれば、金本位制に結びついた青銅貨幣は、流通していた他の形態の貨幣に比べて、かなりの程度に大小と金屬組成が變動しにくかったことが明らかであり、少なくともこれらの場合においては、額面と金屬としての實質価値の間の關係がいくらか重視されていたことを示している。おそらく、こうした兌換可能な貨幣は、金本位制をも管理していた政府當局によって發行されたものであろう。同様に、楚において、貨幣が政府によって發行されていたことはまず確實である。

いかなる貨幣も特定の國家の政府によって發行され、その權威に裏付けられていたという見解は、傳統中國の多數の學者によって當然のこととして久しく疑問の餘地無く受容されてきた。しかし著者は、この見解が支持しえないことを説得的に證明している。驚くべきことに、東周中國において、貨幣流通の最初のイニシアティブは政府が掌握していたのではなく、またかつて存在した政府發行の貨幣も必ずしも最も多數で廣く使用された貨幣の形態ではなかったのである。逆に、著者のデータに照らせば十分に明ら

かだが、中國における最初の貨幣使用は邊境地域に位置する商業團體において發生し、それは經濟的・政治的境界を越えうる中立的な交換手段が必要とされたためである。貨幣が成功裏に使用されるようになって数十年のちによりやく、政府は、經濟を管理する手段としての貨幣の有用性に氣附くようになった。貨幣の使用が戰國時代中國の國家行政の効率向上に正確にどの程度關聯していたかはなお解明の餘地がある。著者の暗示するところでは、ともかく、貨幣は政府にとつて増加しつつあった軍隊の軍資金を保證する手段として不可欠のものとなった。著者は、多くの形態の貨幣（魏の邊境都市で製造された數種類の橋形方足布や齊大刀）は、特にこの目的のために發行されたと提起している。

多くの形態の貨幣やその銘文に對する慎重なニュアンスをもつた分析を通じて、著者は貨幣が發行される多くの種類の異なった狀況を説得的に提示している。かれの所見は、古代中國の貨幣の大部分ではないにしても多數は、都市を基盤とする商人および／あるいは職人の自治的組合によって發行されたという加藤繁の推定をおおむね確認する<sup>19</sup>。銘文は都市自體か個々の發行者もしくは發行者團體の何らかの形式の名稱を記す。そうした詳細はしばしば極めて説明困難である。同じ銘文が時に多くの異なった形態の貨幣に見えるという事實は、同じ都市の中に異なった發行單位があったことを示している。なお限られてはいるが、考古學的発見は、貨幣が特にそれに特化した工房ではなく、あらゆる種類の金屬製品を製造する工房で製造されたことを示唆している。一般的にいつて、政府の關與は時とともに増大したが、これらの工房は大部分が私營であったようである<sup>20</sup>。

重要な地域的差異があつたことは確かである。とくに楚と秦は、貨幣の受容は東アジア大陸部の他の地域より遅れるが、比較的早くから國營の通貨制度をもち、燕では、特徴的な刀錢の製造は戰國時代には國家に獨占されていたようである。一方、三晉と周王朝では、秦の征服に至るまで國家以外の貨幣發行が一般的で、政府發行の貨幣は流通貨幣のごく小さな部分に過ぎなかつた。著者によれば、これは北中國のこの部分における政府當局の相對的な弱さ、その一方で自治的な經濟的そしておそらくは政治的單位としての都市の高度の發展を證するものである。

東周集落の體系的な考古學的發掘が依然缺如しているため、現時點で貨幣は、そこで營まれた經濟活動に關するきわめて限られた情報源の一つである。より一般的に、東周時代中國に存在していた「都市文化」についてはほとんどわからない。傳承文獻はほとんど役に立たない。貨幣以外の主要な銘文資料は陶文だが、貨幣の銘文に比べてなお謎めいており、解讀困難である。貨幣を發行する團體もしくは組合は、中國史ののちの時代にはほとんど見えない一種の自治組織を代表するものといえよう。それをよりよく理解するには、いずれ中世および中世以後のヨーロッパの都市との比較を試みるのがよからう。

著者は、それぞれの團體の經濟圏を評價するために、貨幣をどのように用いるかを示すことで、これら團體の理解に重要な貢獻をなしている。たいへん面白いことに、異なった形態の貨幣の流通は、多數の相互に重なり合った市場制度が同時に機能していたことを示している。それらは交換の様相や水準の相違とともに、おそらくは何よりも、關聯する經濟主體間の關係の相違を證明し

ている。それぞれの形態の貨幣が、詳細な個別的研究を通じて解明されねばならないような、個別的な問題群を提起している。

著者は分析の對象である貨幣の使用に伏在する經濟もしくは貨幣理論を論ずることを控えている。こうした理論は、いずれにせよ、當時高度に發達し、あるいは統合されていたとは思えない。齊の管仲（前七二二〜前六四五年頃）のような東周時代の人物に傳統的に歸せられてきた經濟思想の全てではないにしても大部分は實際には漢さらにそれ以後に年代づけられる。むしろ著者の所見は、傳承文獻資料が、量的にも信憑性においても、深刻な限界をもつことを有力に例證している。これはとくに經濟問題に妥當するのであり、文獻から選別されたごくわずかな情報が多、多くの場合、考古學的資料によつてにべもなく否認されるのである。これらの問題を解決し、少なくともいくつかの空白を補填するため、著者の貨幣に關聯した研究が、われわれが今日有しているものよりずっと包括的な、都市生活に關する考古學的資料によつてすぐにでも補完されることを熱望するものである。

著者のデータベースに投入された膨大な研究努力は最高級の賞賛に値する。近年に至るまで、この種の研究は、利用可能なデータベースがあまりにも分散していたため、要領を得ないものであつた。今日でも、一九五〇年頃までに數萬件の貨幣が発見され記録されているが（精度については程度がかなり異なるが）、その標本はなお體系的でない。しかし資料總量の増加で、本書で描かれたような分布パターンが當時の實狀を反映する可能性が増大し、データベースは、統計學的な標本抽出法を念頭に置いて集められたものではないが、代表性をもつものに近づきつつある。著

者によって強く感じさせられることだが、多数の残された問題は持続的な考古学的研究によって解決しうるが、将来の発展は非常に本質的には、より多数の完全に文脈化された考古学的アセンブリ群の復元に依存している。中国における遺物や遺跡の盗掘が規制されることが望まれる。いかなる資料も地中にある限り科学的に発掘しうるからである。

要するに、本書は最高級の重要性と価値をもつ革新的な業績である。研究の現段階でなしうることについての模範として推奨されるだけでなく、より多くのデータが利用可能になった時点で學者たちが取り組めるような多くの研究課題を構築することにも役立ち。

およそ古代中国や経済史への関心をもつものは本書を読むべきである。學問的方法に貢献し、考古學が經濟問題の理解に貢献しうることを証明したことで、本書は歴史學・人類學に屬する全ての分野の學者の注目を受けるに値する。

## 註

- (1) べらごごごは、たよえ、Yungui Li, "On the function of Cowries in Shang and Western Zhou China," *Journal of East Asian Archaeology* 5.1-4 (2003): 1-26 を見よ。
- (2) William W. Tarn, *The Greeks in Bactria and India* (Cambridge: Cambridge University Press, 1938).
- (3) 馬振智他『大唐遺寶：何家村窖藏出土文物展』(西安、陝西人民出版社、二〇一〇)、七四～八九頁。
- (4) べへに、Wang Yu-ch'uan (Wang Yüquan 王毓銓、1910-

2002), *Early Chinese Coinage* (New York: American Numismatic Society, 1951) のよび著者自身の中國語譯が『我國古代貨幣的起源與發展』(北京、科學出版社、一九五八) として出版された) べ Peng Xinwei 彭信威 (1907-1967), *A Monetary History of China*, 2 v. (Bellingham: Center for East Asian Studies, University of Western Washington, 1994. 著者の『中國貨幣史』(上海、羣聯出版社、一九五四) の Edward H. Kaplan による翻譯)。Dai Zhigiang and Zhou Weirong, "Studies of the Alloy Compositions of More than Two Thousand Years of Chinese Coins (5<sup>th</sup> century BC-20<sup>th</sup> century AD)," *Journal of the Historical Metallurgy Society* 26 (1992): 45-55 をよび言及するに値する。

(5) Ke Peng, "Coinage and Commercial Development in Eastern Zhou China" (PhD dissertation, University of Chicago, 2000). べの博士論文に基づく本の原稿が一期期出回ったが、わたしの知る限り、出版されていない。

(6) François Thierry, *Catalogue des monnaies chinoises, v. 1: L'antiquité préimpériale* (Paris: Bibliothèque nationale de France, 1997). フランスの地域的状況のよび、この圖録は重要な貢献をなし、好評を博してゐるが (*Arts asiatiques* 54 [1999]: 171 の Michèle Pirazzoli-t'Serstevens の書評を見よ)、本書に比べるとその材料ははるかに乏しく、また江村によって参照され、部分的に否認されているいくつかの中國資料に大幅に依存している。

(7) 睡虎地秦墓竹簡整理小組『睡虎地秦墓竹簡』(北京、文物



- 出版社、一九七八、五五頁。
- (8) 『漢書』西域傳上「罽賓：以金銀爲錢，文爲騎馬，慕爲人面」。A. F. P. Hulsewé, *China in Central Asia: The Early Sage; An Annotated Translation of Chapters 61 and 96 of the History of the Former Han Dynasty* (Leiden: Brill, 1979), pp. 105-106 を参照。この書物にこそ御教示うたたらた Christoph Harbsmeier 教授、よひに Rudolf G. Wagner 教授に感謝する。
- (9) 趙雲峰「記山西曲沃縣出土の春秋布幣——兼論布幣の淵源問題」、『中國錢幣』一九九六一、八—二二、二九頁。
- (10) 北京市文物研究所山戎文化考古隊「北京延慶軍都山東周山戎部落墓地發掘紀略」、『文物』一九八九—八、一七—二五、四三頁、特二一九頁。よひなる包括的な情報については北京市文物研究所『軍都山墓地：玉皇廟』第二冊（北京：文物出版社、二〇〇七）、一〇〇六—一〇〇七頁を参照。
- (11) Lothar von Falkenhausen, *Chinese Society in the Age of Confucius (1000-250 BC): The Archaeological Evidence* (Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology Press, 2006), pp. 293-399（日本語譯『周代中國の社會考古學』【京都：京都大學學術出版會、二〇〇六】、一三三—二二〇頁）を参照。
- (12) Joseph Needham, *Science and Civilization in China*, v. 3 (Cambridge: Cambridge University Press, 1971), 107, 186, 273 をよひ議論せられたる。David W. Pankenier, "Reflections of the Lunar Aspect on Western Zhou Chronology," *Young Pao* 78 (1992): 33-74, 特二 pp. 56-57 を参照。
- (13) Ernest G. McClain, "The bronze chime bells of the Marquis of Zeng: Babylonian biophysics in Ancient China," *Journal of Social and Biological Structures* 8, 2 (1985): 147-173.
- (14) Bo Lawergren, "Strings," in Jenny F. So (ed.), *Music in the Age of Confucius* (Washington, D. C.: Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, 2000), pp. 65-85; idem, "Western Influences on the Ancient Chinese Qin Zither," *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 75 (2003): 79-109.
- (15) 李零『人山與出善』（北京：文物出版社、二〇〇四）、八七—二六一頁。
- (16) Lothar von Falkenhausen, "Mortuary Behavior in Pre-Imperial Qin: A Religious Interpretation," in John Lagerwey (ed.), *Religion in Ancient and Medieval China* (Hong Kong: Chinese University Press), vol. 1: 109-172, 特二 pp. 154-155; Lukas Nickel, "Tonkrieger auf der Seidenstrasse. Die Plastiken des Ersten Kaisers von China und die hellenistische Skulptur Zentralasiens," *Zürich Studies in the History of Art (Georges Bloch Annual)* 13-14 (2006-07): 125-149.
- (17) Donald B. Wagner, *Ferrous Metallurgy*, i.e., Joseph Needham, *Science and Civilization in China* v. 5: 11 (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), pp. 83-114.
- (18) この重要な問題に關する豫備的資料を Minku Kim, "The Genesis of Image Worship: Epigraphic Evidence for Early Buddhist Art in China," Ph.D. dissertation (University

of California, Los Angeles), 2011 に見える。

- (19) 加藤繁『支那經濟史考證』上(東京、東洋文庫、一九五二)、同『中國貨幣史研究』(東京、東洋文庫、一九九二)。  
この所見は、關野雄が『中國考古學研究』(東京、東京大學東洋文化研究所、一九五六)において考古學的に追認している。同『中國考古學論考』(東京、同成社、二〇〇五)をも見よ。
- (20) Anthony Barbieri-Low の秀逸な著作 *Artisans in Early Imperial China* (Seattle: University of Washington Press, 2007) は工房組織の歴史におけるより後の段階を描いている。
- (21) 考古學的發見と銘文から當該時代の地域的な社會組織(主

に農村レヴェル)の諸局面を復元する一つの試みとしては、俞偉超『中國古代公社組織的考察…論先秦兩漢的“單一彈”』(北京、文物出版社、一九八八。日本語版『中國古代の社會と集團』(東京、雄山閣、一九九四))を見よ。示唆的ではあるが、兪の結論は全面的には受容されていない。

- (22) 王恩田『陶文圖錄』(濟南、齊魯書社、二〇〇六)。秦については、袁仲一・劉鈺『秦陶文新編』(北京、文物出版社、二〇〇九)を見よ。

(吉本 道雅 譯)

二〇一一年一月 東京 汲古書院  
A五判 六十四七二頁 一五〇〇〇圓十税